

全国大学ゴルフ指導者研究 第14号

(2024年11月)

■ ゴルフ創始期のスコットランド貴族のプレーぶり



全国大学ゴルフ指導者研究会

The Japan Society of Collegiate Golf Teaching Association

〈JSCGT〉

全国大学ゴルフ指導者研究 第14号

目次

I. 巻頭言	鈴木 昭彦 会長	・・・1
II. ゴルフ指導者研究雑考		・・・2
大学におけるゴルフ授業の実践と学生の健康管理上の課題		
	日本福祉大学スポーツ科学部	山根真紀
	筑波大学大学院人間総合科学学術院	土田ももこ
	筑波大学体育系	武田 文
ゴルフの授業について考える		
ー学内のゴルフ施設と授業形態、学生の特性を考慮してー		
	日本大学	沖 和磨
書評：「ゴルフの力学」[著] 松本 協		
	千葉工業大学先進工学部	金田晃一
今、研究会の役割を考える		矢崎 弥
III. 令和5年度全国大学ゴルフ指導者研究会 第28回指導者研修会報告		・・・22
1. 開催要項、日課・日程、参加費用、公認指導者認定実施要項		
2. 実技研修会 前田総太郎プロによるレッスン		
3. 講義報告 前田総太郎プロ		
IV. 全国大学ゴルフ指導者研究会総会資料		・・・27
2023年度（令和5年度）決算書		
2023年度全国大学ゴルフ指導者研究会第28回研修会収支報告		
2024年度（令和6年度）予算		
V. 会則・会員名簿		・・・30

I. 巻頭言

会 長 鈴木 昭彦

全国大学ゴルフ指導者研究会第14号が充実した内容で刊行される運びとなりました。刊行までご尽力を頂いた研究誌作成委員の先生をはじめ、本会の理事の皆様には心から感謝申し上げます。

昨年同様、今年も世界情勢は相変わらず不安定です。ロシアとウクライナの戦争は停戦の兆候すら見せず、さらに、イスラエルとパレスチナの紛争も泥沼化するなど、地球規模での異常気象も含めて、危機は拡大しています。

そのような中でパリ五輪が開催され、オリンピックの活躍が世界中の人々に、明るさと感動を与えました。ウクライナ女子走り高跳び、ヤロスラワ・マフチク選手の金メダルに多くの人々が歓喜した映像が世界中を駆け巡りました。日本でも、柔道、レスリング、フェンシング、アーバンスポーツでの連日のメダル獲得は多くの人々に元気をもたらしました。スポーツのこの力に、私自身、嬉しく感じ、力づけられました。

ゴルフ競技では松山選手、山下選手の優勝争いに歓喜しました。それ以上に、松山選手は次回のロサンゼルス五輪の競技会場に決定したりビエラカントリーでのジェネシス招待とプレーオフ第一戦、フェデックス・セントジュード選手権に優勝し、一年を通して我々を沸かせてくれました。勿論、女子も負けずに、全米女子オープンで笹生選手、エビアン選手権で古江選手が優勝し、日本選手の活躍が目立ったシーズンでした。世界のゴルフツアーでの日本の活躍に影響を受け、多くのメディアやネット、SNSが活躍やサイドストーリーを発信するだけでなく、様々な分野の方々がゴルフとの関わりを積極的に発信しています。

今です。この流れのなかで、多くの若い学生たちにゴルフの技術、文化を伝え、楽しんでもらいましょう。本研究会で、初心者指導を担当する指導者の育成、授業での指導方法等について研鑽を重ね、多くの学生にゴルフを実践してもらおう。それが我々の役割なのだと思います。そのためにも、研修会への参加者を増やすとともに新規会員数の増加させることがこの研究会の今の課題と考えます。難しい課題ではありますが、これからも会員の皆様のご協力をお願い致します。

本研究会の一層の発展と会員各位のご健勝を願って、巻頭言とさせていただきます。

Ⅱ . ゴルフ指導者研究雑考

大学におけるゴルフ授業の実践と学生の健康管理上の課題

日本福祉大学スポーツ科学部 山根 真紀
筑波大学大学院人間総合科学学術院 土田ももこ
筑波大学体育系 武田 文

1. はじめに

4年生対象のスポーツ指導法演習「ゴルフ」は2020年度から開講され、今年で5年目を迎える。2020年度は新型コロナウイルス感染症のまん延によりオンラインで実施し、ラウンドも行えなかったが、その後、内容を改善しながら現在の形態に落ち着いている。

本稿では、日本福祉大学スポーツ科学部で行っているスポーツ指導法演習「ゴルフ」の授業実践、とりわけラウンドに焦点を当てて紹介し、学生の健康管理上の課題について、特に熱中症対策の観点から考察する。

2. 授業内容

1) 授業のねらい

この授業は、本学部のディプロマポリシーに基づき、「人間の発達に基づいた系統的な指導法」および「スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力」を習得することを目的としている。単にゴルフの楽しさを理解するだけでなく、系統的な指導力を身につけることが求められる。

ほとんどの学生が初心者として履修するため、ラウンドができるレベルまでスキルを向上させることを目指したプログラムを作成している。授業自体が初心者向けの指導法に基づいており、その内容やプロセスをまとめることが評価の対象となる。

2) 履修状況

スポーツ指導法演習「ゴルフ」は4年生を対象に、最大24名の定員で開講している。毎年、定員を上回る履修希望者があり、一定の基準に基づいて抽選を行っている。2024年度も30名以上の履修希望者から24名に絞った。また、例年5～8名の女子学生が履修しているが、今年度は1名と例年に比べて少なかった。

3) 授業スケジュール

図1に2024年度の授業スケジュールを示す。授業は前期の金曜日1限に配置され、オリエンテーションを含む第11回までが学内での実習、その後、2コマ連続の授業を2日間、近隣の新南愛知カントリークラブ（新南愛知CC）で実施した。

学内での練習は、ゴルフ練習場（10打席、奥行き約7m、図2）と野球場で行った。ゴ

ルフ練習場ではコースボールを使用し、野球場ではプラスチックボール（7番アイアンで約80m 飛ぶ）を用いた。また、実技以外では、ラウンドに必要なルールやマナー、ラウンドの準備に関する講義も行った。

1	生理(講義)	4/5	金1	オリエンテーション：スケジュール確認(資料配布)、自己紹介、用具の確認	
2	ゴ練※	4/12	金1	ゴルフスイングの基本1：①グリップ、②ボディターン	
3	ゴ練	4/19	金1	ゴルフスイングの基本2：①9時⇒3時のスイング、③フルスイングへ	
4	野球場	4/26	金1	アプローチ：15ヤードと30ヤードの打ち分け	
5	生理(講義)	5/10	金1	ゴルフコースについて：ゴルフコースの基礎知識(講義)	
6	野球場	5/17	金1	スキルチェック①：7Iと9I、15ヤードと30ヤードのアプローチ	
7	リズム室	5/24	金1	パター練習※雨天時	
8	ゴ練	5/31	金1	課題練習1：ビデオ撮影	
9	野球場	6/7	金1	課題練習2：ビデオ撮影	
10	野球場	6/14	金1	スキルチェック②：7Iと9I、15ヤードと30ヤードのアプローチ	
11	生理(講義)	6/21	金1	コースラウンドのためのルールとマナー	
12・13	コース	6/27	木4・5	(新南愛知CC) 打撃練習とコースラウンド (4H)	4・5時限連続
14・15	コース	7/4	木4・5	(新南愛知CC) 打撃練習とコースラウンド (4H) まとめ	

図 1. 2024 年度授業スケジュール



図 2. ゴルフ練習場

4) コースラウンドの概要

コースラウンドは例年、6月末と7月上旬の木曜日に2日間実施しており、4・5限（15:00～18:30）に設定している。場所は前述の通り新南愛知CCである。授業内容は、打撃練習とパター練習、その後の4ホール（4H）のラウンドで構成されている。このように、大学から車で10分以内の場所にある新南愛知CCでラウンドができることは、非常に恵まれた環境といえる。ラウンドは、各組に学生3名と指導者（大学教員2名、ゴルフ部6名）1名が加わり、4名1組で行う。当日のスケジュールは以下の通りである

- 14：45 学生新南愛知 CC 駐車場に集合、健康チェック、練習場へ移動
 15：00 打撃練習（練習場）ボール拾い、パター練習
 16：20 順次スタート（A チーム：1～4 組 1H → 2H → 3H → 4H、
 B チーム：5～8 班 3H → 4H → 1H → 2H、2 回目は交代）
 18：30 解散

【写真：授業の様子】



ラウンドでは、各組ごとにドライバー、フェアウェイウッド、7 番アイアン、PW、パターなどから、それぞれ数本ずつ選んで入れたゴルフバッグを準備する（大学貸与）。ラウンドはスクランブル方式を採用する。具体的には、1 打目は全員が打ち、2 打目は 3 人の中で最も良いボールを選択し、そのボールの位置から全員が次のショットを打つ。この手順を繰り返し、グリーン上でのパターも同様に行い、誰かのボールがカップに入った時点でスコアが確定する。スクランブル方式の採用には、ゴルフの戦略を学ぶことができる点、ミス相互にカバーできることでプレー時間の短縮につながる点、およびボールの選択時に必ずコミュニケーションが発生するという利点がある。

3. ゴルフラウンドに関する学生の感想（20名のレポートから）

ラウンド後の学生の感想を集計した結果を図3に示した。「楽しかった」と回答した学生が12名で、全体の60%と最も多かった。楽しかった理由としては、自然を感じられること、コミュニケーションが取れること、そしてゴルフそのものの魅力があげられている。一方で「難しい、上手くいかない」と感じた学生は8名、40%、傾斜があったり芝があったりと「練習と違う」と感じた学生は7名、35%であった。履修者のほとんどが初心者であるため、授業時間だけで大幅なスキル向上は難しいが、ラウンドを通じて、練習場では学べない多くの要素を体験し、その学びがゴルフの理解を深めることにつながったと考えられる。

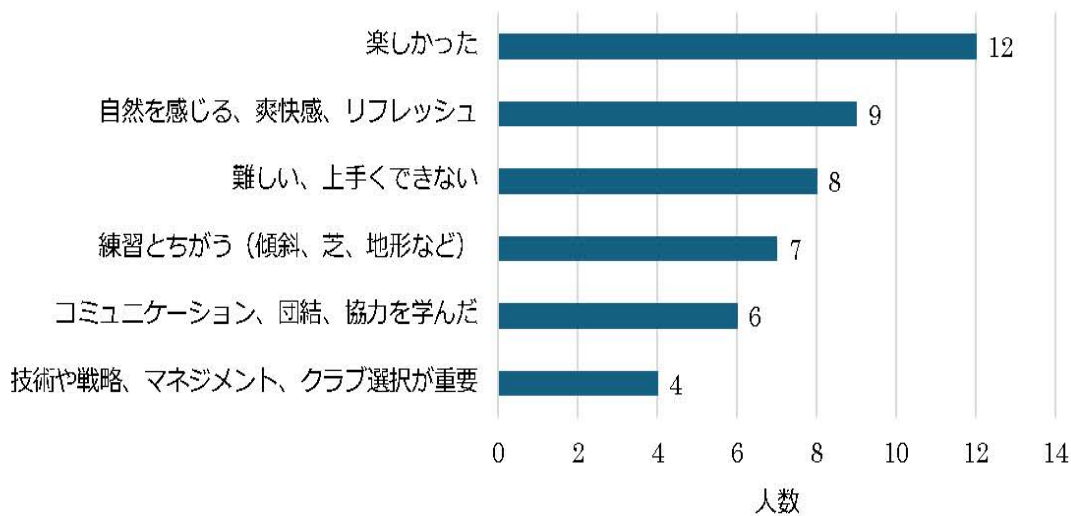


図3. 学生の主な感想 (n=20)

4. 実習における学生の健康管理、特に熱中症対策に向けた課題

近年、地球温暖化に伴う気温上昇から熱中症による救急搬送が増加している¹⁾。図4に新南愛知CC付近の2023年と2024年の月別最高気温と平均湿度を示した。両年とも、6月以降は最高気温30℃以上、平均湿度80%以上の高温多湿な環境下となっており、ゴルフ実習では熱中症リスクを考慮した学生の健康管理が不可欠である。

熱中症の予防策としては、吸湿性や通気性のよい服装や帽子の着用、涼しい場所での休憩、氷や保冷剤を用いた身体の冷却、冷たい水やスポーツ飲料、経口補水液などのこまめな水分補給のほか、実習以前から身体を徐々に暑熱に慣らしておく暑熱順化も有効である。熱中症の主な症状には、めまいや立ちくらみ、顔のほてり、筋肉痛や筋肉のけいれん、大量に汗をかく、あるいは全く汗をかかない、頭痛、吐き気、倦怠感、高体温などがある。これらが疑われる場合、応急処置の基本は、涼しい場所への移動、衣服を脱いで体を冷却、および水分や塩分の補給であり、意識がない場合はすぐ医療機関へ救急搬送する。学生が正しい知識を身につけて適切な行動をとることができるよう、今後これらに関する教育を含めた授業内容を検討する必要がある。

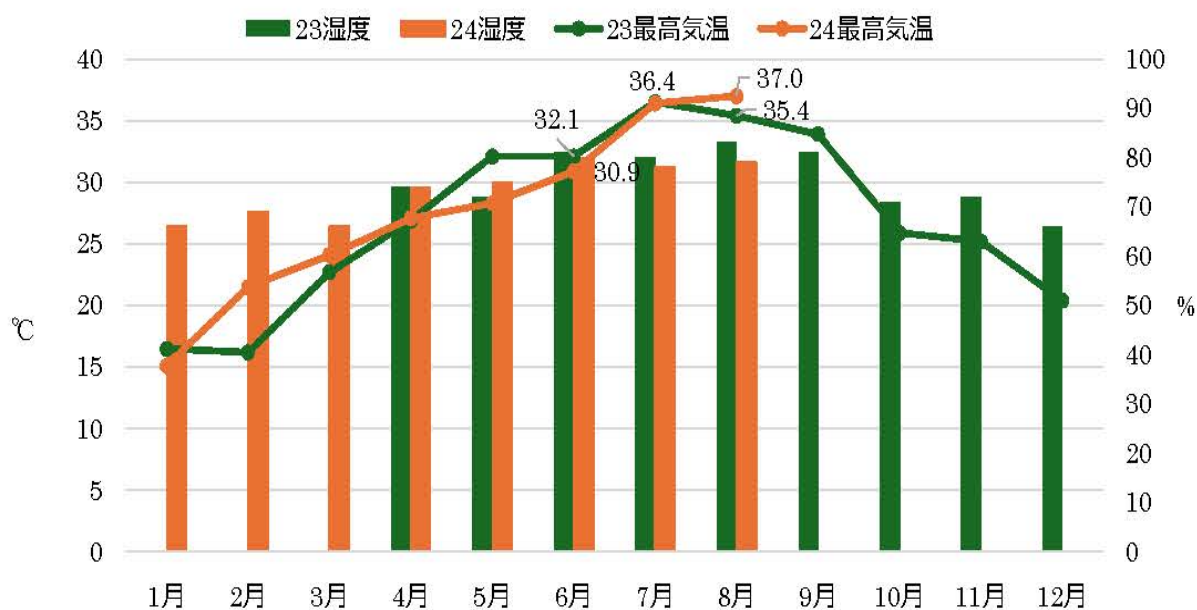


図 4. 新南愛知 CC 付近の最高気温と平均湿度（2023 年、2024 年）

参照：気象庁 HP²⁾

5. 終わりに

本学におけるゴルフ実習授業の実践について、ラウンドを中心に報告し、夏季の実習授業における学生の健康管理上の課題について、特に熱中症対策の観点から考察した。大学から車で 10 分以内のゴルフ場を利用でき、打撃練習やパター練習を含むラウンドが可能であるという恵まれた環境は、学生のゴルフに対する理解を深める上で有利に働いている。一方で、高温多湿な気候条件下でのゴルフ実習は、学生の熱中症リスクを高めるため、適切な健康管理対策が不可欠である。今後、学生が熱中症に対する正しい知識を持ち、適切な行動をとることができるよう、これらの教育内容を授業に組み込む必要があると考えられる。

【参考文献】

- 1) 総務省消防庁, 令和 5 年 (5 月から 9 月) の熱中症による救急搬送状況. 閲覧日 2024 年 9 月 21 日. <https://www.fdma.go.jp/disaster/heatstroke/post1.html>
- 2) 気象庁 HP, 各種データ・資料>過去の気象データ検索>月ごとの値 (愛知県南知多). 閲覧日 2024 年 9 月 21 日. https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/view/monthly_a1.php?prec_no=51&block_no=0984&year=2023&month=07&day=&view=a2

ゴルフの授業について考える

—学内のゴルフ施設と授業形態、学生の特性を考慮して—

日本大学 沖 和磨

1. はじめに

ゴルフは老若男女問わず幅広い世代がプレーできるスポーツである。新型コロナ禍においては「3密」を避けられる身近なレジャーとして注目され、20～30代を中心にゴルフ練習場利用者が増加した（吉川、2023）。一方で、プレーフィーや用具が高いなど金銭に関する要因と、うまくならなかったなど技術に関する要因、高齢による不健康に関する要因がゴルフをやめる主な理由として挙げられる（北と森、2017）。したがって、ゴルフ人口を増加させ、ゴルフ業界を発展させていくためにはゴルファーにゴルフを継続してもらうとともに、若い世代のゴルファーを増加させることが重要である。それらを考慮し、大学におけるゴルフの授業の在り方を考えると、受講生の技術を向上させ上達の喜びを実感させるとともに、自然の中でありのままを楽しむゴルフの魅力を伝え、卒業後もゴルフを継続するよう導くことが1つの使命である。本論では、大学におけるゴルフ授業について、学内のゴルフ施設や学生の特性を考慮した一例を述べる。

2. 学内のゴルフ施設と授業形態

筆者の所属大学では学部によってキャンパスが分かれているため、体育の授業も学部単位で行われる。したがって、体育授業の教材となるスポーツ種目も学部内の施設の有無によって異なる。とりわけ筆者が所属する理工学部における現行のカリキュラムでは、教養教育科目として体育の授業が設置されており、20打席ある約10yのドライビングレンジでレンジボールを使用したゴルフの授業が行われている。ゴルフの授業を設置している大学は多くあるが、グラウンドやテニスコート、体育館においてプラスチックボールを使用した授業であることが多いため、本学部ではより実践的な授業を展開していると言える。また、授業の形態は Semester 制で1年次の前期と後期に学内ゴルフ場で週1回の実技授業が各15回展開されていることに加えて、2年生以上を対象として学外のゴルフ練習場やゴルフコースで実施される夏季集中授業も設置されている。つまり、本学部の学生は1年次の前期と後期、2～4年次の夏季休暇中と最大3コマのゴルフ授業を履修する機会が与えられている。特に夏季集中授業におけるラウンドの経験は学生が卒業後にゴルフを継続していくための鍵になると考えられるため、1年次の通常授業でゴルフを履修した学生には夏季集中授業への参加を推奨している。実際には日程の不都合もあってか通常授業と夏季集中の両方を履修する学生は少ない。一方で、通常授業および集中授業ともに常に受

講定員を満たしており、本学部に在籍する学生のゴルフに対する興味や関心の高さが伺える。

3. 授業展開と指導法

本学部では前述のような理由から、3 コマあるゴルフの授業を一連のものとして授業計画を立てるのではなく、1 コマ完結の授業計画を立案し、15 回の授業の中で受講生に上達を実感させることが必要となる。ゴルフにおけるショット技術の上達には、最適な用具の選択や、個々人の体力と身体アライメントに最適なスイングをみつけることが重要である。しかしながら、授業という制約の中でクラブフィッティングを行うだけの用具をそろえることは現実的ではないし、様々なスイング理論の中から個々人の特性に合ったものを見つけることも時間的に厳しい。そこで、極力シンプルなゴルフ理論を用いて汎用性の高い指導が求められる。昨年度と一昨年度に開催された全国大学ゴルフ指導者研究会の第 27 回および第 28 回指導者研修会において講師を務めてくださった前田総太郎プロのスイング理論では、ゴルフクラブはスイング中のいかなるシチュエーションにおいても身体の正面に位置しているという非常にシンプルなものである（前田、2023）。具体的には、脊椎を体幹の回転軸としてスイングを行う際にグリップエンドは常におなかを指すが、ヘッドはテイクバック時には身体から外方に離れ、インパクトで身体に一番近い位置を通り、フォロースルーでは身体から外方へ離れていくといった身体とゴルフクラブの相対的な位置関係をとることで、ヘッドの直進性の軌道を長くとることを可能にするスイング理論である。この理論に従えば、受講生は授業内におけるショットの練習においてアドレスはもちろん、トップオブスイング、インパクト、フィニッシュなどスイング中の様々なポイントで自身とクラブの位置関係を確認することができるため、セルフフィードバックが可能となる。理工系教育において問題解決能力や批判的思考力の向上は重要であり（Prince and Felder、2006）、セルフフィードバックが可能となることでそれらの能力の向上に貢献できだけでなく、教員からの助言に納得して技術を修正することができるため、前田式ゴルフ理論は本学部の学生にとって非常に有用な理論であると考えられる。

4. まとめ

本論では、大学における教養としてのゴルフ授業について、学内のゴルフ施設や授業形態、学生の特性を考慮して述べてきた。これらの実践報告として、今年度より筆者が担当するゴルフの授業において前田式ゴルフ理論を導入し授業を展開したが、多くの受講生は筆者からの助言に対して納得するとともに自身でセルフフィードバックを行いながら授業に取り組んでいた姿が印象的であった。また、本論の執筆にあたり様々な調査を行う中で、

本学部が他大学と比較して恵まれたゴルフ施設を有していることや、本学部に在籍する学生のゴルフに対する興味や関心の強さが実感できた。そのような恵まれた環境を最大限に活用して学生に満足度の高い授業を供給し続けることが筆者らの使命であり、これからもゴルフの指導者として精進していきたい。

【参考・引用文献】

- ・ 吉川雄大（2023）ゴルフ産業の現状とその可能性. スポーツ未来開拓会議（第7回）.
https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/sports_future/pdf/007_04_00.pdf
- ・ 北徹朗、森正明（2017）ゴルファーの離反理由に関する研究－ 2020 東京五輪に向けたゴルフ市場活性化への提言－. 中央大学保健体育研究所紀要 35：pp.108-116
- ・ 前田総太郎（2023）講義報告. 全国大学ゴルフ指導者研究 13：pp. 22-25
- ・ Prince MJ and Felder RM (2006) Inductive Teaching and Learning Methods: Definitions, Comparisons, and Research Bases. Journal of Engineering Education 95(2): 123-138

本書は、米ジェイコブス 3D ゴルフのアドバイザーメンバー兼オフィシャル日本アンバサダーの松本協氏によるゴルフのショット動作に関する力学解析に基づいた解説書である。

本書の第一章にも書かれているが、松本協氏は 28 歳から国際金融マンとして欧州を中心に活躍し、その間、主に英国でゴルフに興じていた。日本への帰国後は数々のレッスンプロに学ぶ中でゴルフクラブの力学に上達の鍵があるのではないかと思い立ち、ゴルフサイエンス取り組んだ。そんな中、米 PGA のティーチングプロであるマイケル・ジェイコブス氏の著書「エレメンツ・オブ・ゴルフスイング」(筆者の調査では当該時期にそのような著書は見当たらなかった。「Elements of the Swing: Fundamental Edition」ではないかと推測する)と出会い、これをきっかけに物理と数学を学び直し、ついに著者本人に直接会うに至った。そしてマイケル・ジェイコブス氏に指導を受け、アジア人発のジェイコブ 3D ゴルフのアドバイザーメンバー兼オフィシャル日本アンバサダーとなった。その後、USGTF のティーチングプロの資格を取得し、現在はゴルフリサーチャーとして Youtube チャンネル「TASKGOLF」などでゴルフサイエンスに基づいたゴルフ理論を紹介し、ゴルフの普及と発展に努めている。

ジェイコブス 3D ゴルフは、光学式のモーションキャプチャーシステムを用いてゴルフスイング中のゴルフクラブの力学解析を行うシステムで、特にプレーヤー(一人称)視点での力学解析を行うところが特徴的である。本書は、このジェイコブス 3D ゴルフによるゴルフクラブの力学解析結果をもとに、どのようにゴルフクラブを扱うべきかについて解説している。本書内には基本的な物理式としてニュートンの運動法則やその第二法則として直線運動と回転運動の力としてのフォースやトルクなどの物理用語などが出現するが、それらの意味するところを物理や数学の知識なくとも理解できるように解説されており、ゴルフの上達やゴルフの理解を目指す読者にとって有益な情報が掲載されている書籍である。

本書は全五章で構成されている。第一章では日本のゴルフ界の現状についての問題提起から始まり、上述した著者自身のゴルフ経験をもとにゴルフサイエンスに取り組むきっかけが書かれている。ゴルフではクラブをいかに適切に扱うかが重要であることや、本書の副題である「クラブが主、カラダは従」であることの重要性が述べられている。

第二章ではジェイコブス 3D ゴルフの成り立ちや、ジェイコブス 3D ゴルフが取り扱っ

ているキネティクス(力学)と身体運動の計測結果であるキネマティクス(運動学)の違いについて述べられ、ゴルフスイングはゴルフクラブの挙動を理解することから始めるべきという観点から、ニュートン力学や直線運動・回転運動の力学の基本とプレーヤーがクラブの挙動に影響を与える唯一の接点であるグリップの重要性について書かれている。

第三章では、ゴルフクラブは他のラケット・バット用具と比較して偏重心特性を持つことや、どのように偏重心特性を持つゴルフクラブの重心を管理するべきなのかについて書かれており、プレーヤーがグリップを通してクラブに与えることができる直線運動(フォース)や回転運動(トルク)とそれによって発生するクラブのローテーションの基本的な仕組みについて、3次元的な視点から解説されている。

第四章では、いよいよジェイコブス 3D ゴルフによるスイング動作の解析結果に基づき、テークバック・切り返し・ダウンスイングからインパクトに至るまでの力学的な考察がされている。その上で、どのようにグリップを握るべきか、テークバック・切り返し・ダウンスイングにおいてプレーヤーがグリップを通してどのような力をクラブに与えるべきかが解説されている。

第五章では、米PGA ツアーのトッププレーヤー、下部ツアーのプロプレーヤー、アマチュアプレーヤーそれぞれのジェイコブス 3D ゴルフによるスイング動作の解析結果が図とともに紹介され、それぞれのグリップを通したクラブの扱い方の違いが示されている。さらに日米女子プロプレーヤーのスイング動作についても同様にジェイコブス 3D ゴルフによる解析結果が図とともに紹介されその違いが示されており、ここから日本ゴルフ界の問題点についても述べられている。

筆者は人の身体運動についてバイオメカニクス・生理学的視点から捉え、そのメカニズムを解明することを研究対象としている。もちろん筆者自身は研究者としても、そしてプレーヤーとしてもゴルフスイングは興味の対象である。本書はジェイコブス 3D ゴルフの解析結果から数々の考察がされているが、ジェイコブス 3D ゴルフの解析結果は全て動作計測に基づく力学解析であり、物理と数学を基にして解かれている。そのため、解析結果については理論的に疑いようがなく、まさにその通りだと考える。しかし、ジェイコブス 3D ゴルフが取り扱っているのはクラブの挙動に影響するグリップにおける力学的作用であり、そのために人はどのように身体を扱えば良いか、というところは不明である。本書の中でも度々書かれているが、人は身体的特徴が異なるため身体動作いわゆるスイング動作は個々に異なり、グリップの軌道を見ても同一のものは存在しない。つまり、物理法則に従った適切なゴルフクラブの挙動を達成するために、スイング動作の観点からは人それぞれに対して異なるアプローチが必要、ということである。だからと言って、スイング動作ばかりに気を取られて肝心のクラブを適切に動かすことを置き去りにしてはいけない。

なぜなら、ゴルフはクラブフェースがボールにインパクトしてボールが飛翔するからであり、ボールがどのように飛翔したかがゴルフのパフォーマンスに直結する。従って、結果としてのボールの飛翔に影響を及ぼし、直接人が作用できるクラブを中心にスイング動作を考えていく必要がある。その意味では、やはり本書の副題の通り「クラブが主、カラダは従」なのである。また、これはジェイコブス 3D ゴルフが取り扱っているグリップにおける力学的作用についても同じであると考えられる。本書内では「ジェイコブス 3D はグリップの内圧の変化を直接測っているわけではないから説得力に欠くと主張する向きも多い。しかし、これは科学を知らない人がいうこと。それは科学的帰納法で明らかに理論的に計算され有意である。」という記述がある。しかし、ジェイコブス 3D ゴルフは物理法則に基づいた計算によってグリップに与えられている力を算出しており、それは人がグリップに与えた力の最終的な結果である。そして、ジェイコブス 3D ゴルフはグリップを一点として見なしている。実際のグリップは両掌で握るため点ではなく面であるため、最終的に出力される(べき)力はジェイコブス 3D ゴルフの解析結果に違いないが、いわゆる「手の内」はわからない。例えば、最終的に出力される力は +5 であっても、「手の内」では右手で -2 と左手で +7 の力が働いている場合もあれば、右手で +2 と左手で +3 の力が働いている場合もある。さらに言えば、右手の中でもどの部分でどの程度の力をグリップに作用させているのか、といった観点もある。つまり、人がグリップに対してどのように力を与えているかは、グリップの内圧の変化を直接測る必要がある。このようなスイング動作やグリップの「手の内」を人それぞれがどのように作り上げ、理想的なクラブの挙動を作り、イメージ通りのボールを打つか、というところにゴルフの難しさや奥深さがあるのだろう。

筆者は本書「ゴルフの力学」や「TASKGOLF」の Youtube チャンネル、そして松本協氏がゴルフサイエンスに取り組むきっかけとなった一つである三觜喜一プロの Youtube チャンネル「3284TV」などを参考に自身のスイング動作を構築中である。これまでもさまざまな書籍や Youtube チャンネル、そしてプロに教わったが、これらは最も理にかなっていると感じる。松本協氏や三觜喜一プロに言わせれば「力学解析に基づいた結果なのだから当たり前」と言われそうであるが、その「当たり前」のクラブ挙動を目指して自分のスイング動作を試行錯誤しながら構築しているところである。しかし、理論的にはわかっても体感としては難しいのが現実で「わかる」と「できる」は全く異なる。是非機会があれば松本協氏や三觜喜一プロにも教えを乞いたいものである。また、筆者自身は大学でゴルフ授業も担当しており、当然これらの理論は指導の役に立っている。自身の指導方法もスイング動作主導の指導からゴルフクラブの挙動を主導とした指導に改造中である。自身のためにも、授業のためにも、さらにゴルフ理論を積み上げていきたいところである。

本書の第一章や第五章の最後、そしてあとがきでは、日本のゴルフ界の問題点についても書かれており、競技として、そして生涯スポーツとしての日本のゴルフ界をこれから発展させていくためには何が必要か、といった観点から、日本のPGA や指導者、プレーヤーに対して一石を投じている。この点においては大学でゴルフ授業などを担当する指導者として、そして自らがゴルフを愛好するプレーヤーとして考えさせられるものであり、筆者としては是非とも一読を進めたい。

*：本書は本原稿を執筆現在、TASKGOLF の Web サイトでのみ購入ができるようである。初版は既に完売し、現在は特別増刷されている。本書はまさに今、ゴルフ界では人気の書籍である。

『ゴルフの力学：スイングは「クラブが主」「カラダは従」』

- ・ 著者：松本 協
- ・ 出版社：サンエイ新書 (三栄書房)

今、研究会の役割を考える

矢崎 弥

1. はじめに

本研究誌第13号にて、中島理事長は「研究会の発展に向けて、今求められていることは何か」と題した提言の中で、本研究会の存在意義を語るとともに、そのための活動8項目の確実な発展を目指す組織体制構築を唱えました。そして先生は、実際にその主張を進めております。

雑考という企画は、会員が研究会やゴルフ文化について日頃考えていることや、前号で示された見解に対して批判的検討や新たな問題提起等を雑多に語っていただくために設けられました。私は最後の事項に当たるのかもしれませんが、本会を取り巻く社会的状況とそれに対応する本会の役割について私なりの考えを述べたいと思っております。

まずゴルフ界を取り巻く状況ですが、ゴルフ人口の減少が危機として多く語られていますので、その確認を行い、それを踏まえて、大学ゴルフ授業の可能性と役割について、確認してみたいと思います。

2. ゴルフ界の状況ーゴルフ人口を中心にー

ゴルフ人口の統計データは、社会生活基本調査、スポーツ庁調査、スポーツライフに関する調査（スポーツライフ・データ）、レジャー白書、日本ゴルフ場経営者協会の資料などがあります。2万人を調査しているスポーツ庁の「スポーツの実施状況等に関する世論調査」、約18万人を対象としている総務省統計局の社会生活基本調査を含め、上述のデータは、推測値でもあるため差が生じています。レジャー白書2023では、1994年の1,450万人をピークに減り続け、2015年にはゴルフ人口がピーク時の約半分となる760万人に減少し、2020年にはコロナによるゴルフコースの営業停止や自粛生活も相まって、ゴルフ人口は520万人（スポーツ庁 585万人 社会生活基本調査 890万人）まで減少したと記載されています。その後、コロナ禍、ゴルフ場の環境要因、ユーチューブやテレビ等で多くの芸能人、プロゴルファーのコンテンツが人気を呈したこともあり、20代、30代を中心にゴルフ愛好者が増大し、2021年には40万人増えたと記載されています。この傾向は、「利用税の課税状況からみたゴルフ場数、

延利用者数、利用税額等の推移」(2023年一般社団法人日本ゴルフ場経営者協会調べ)のデータでも表れていますが、スポーツ庁の「スポーツの実施状況等に関する世論調査」や社会生活基本調査(2022年773.9万人)では、毎年減少していると記載されています。以上のように、資料によって多少の増減はありますが、1990年代半ばからゴルフ人口が減少傾向にあることは確かであります。

この傾向においてより深刻に語られるのは、ゴルフ人口が50代以上に偏っていることです。それ故、29歳以下の世代でゴルフ人口が増えない限り、20年後、ゴルフ人口は急激に減少すると危機感をもって語られるのです。レジャー白書2023では、この5年間で15～79歳の総人口は2.4%減少したが、50～78歳に絞ると対象人口は2割弱増えてゴルフ産業を支えてきたこと。10年後以降50～78歳人口が2023年より減少し、20年後の2043年に年間人口200万人世代が70代に到達し、それ以後、急激に50歳以上の人口が減少することになり、ゴルフ人口の急激な減少が予想されると記載されています。同様の言説ですが、15歳から59歳までの人口が2020年から40年後の2060年には58%に減少すると予想され、現在の世代別ゴルフ実施率が変わらないのであれば、30年後には、日本のゴルフ人口が3割以上減少する(ゴルフ市場活性化委員会 2023年10月)との記載もあります。この二つの言説からすると、若年層にゴルフ人口の増大がなければ、30年後には、ゴルフ人口は300万人台に減少するとなります。

ゴルフ人口の減少は、当然のことながらゴルフ場(コース)とゴルフ練習場の閉鎖を引き起こします。事実、ゴルフ場(コース)数が、最大であった2002年の2460箇所から2022年には2196箇所へと264箇所減少し、屋外ゴルフ練習場の減少と利用人数の減少(全国練習場施設数調査2023年10月31日現在公益社団法人全日本ゴルフ練習場連盟)も起きています。シュミレーターを設置したインドアゴルフ練習場が大都市部を中心にチェーン展開されていますが、一桁台の打席数の練習場が大半であり、運営方法も無人の場貸し、レッスンプロ常駐または必要に応じて対応など、各所、試行錯誤の状況であり、なかなか将来的な見通しを語れない状況にあります。(同上 公益社団法人全日本ゴルフ練習場連盟)当然ではありますが、コースや練習場などゴルフを实践する場の減少傾向は、ゴルフ人口と平行に連動していますが、このゴルフの物理的環境には巨

額の金銭が投入されていますので、まずはゴルフ人口という需要源をどうにかしなければならぬのです。

3. ゴルフ人口を増やす方策を考える

近年のゴルフ界の状況を理解する時、全体のゴルフ人口を増やすことは非常に難しいと言わざるを得ません。それは、ゴルフ人口の年齢分布に偏りがあるからであり、前述したように、30才以下のゴルフ人口を増やさなければ、ゴルフ人口を維持することもできないわけです。

それ故、若者のゴルフ人口を増やすためにゴルフ関連協会や団体が協力して様々な努力をしています。子供達対象にスナックゴルフを含めた指導イベントを数多く開催していますし、ゴルフやゴルフ場をより身近なものとして捉えてもらう試みとして、地域活性や交流のためのイベント開催やクロスカントリーのための練習場やフットゴルフなどに利用する試みも行われています。ここ数年、10代のゴルフ人口が14万人に増加しており、協会等の取り組みが効果をあげていることが確認できるのですが、80代のゴルフ人口が20万人以上であり、20代のゴルフ人口が20代以上の世代の中で最も少ないこともあり、このような方策だけで若年層のゴルフ人口増加を期待するのは少々厳しいと言わざるを得ません。(月刊ゴルフマネジメント 2024年10月号)

若者のゴルフ人口を増やすための方策を考える入り口として、「ゴルフ愛好者がどこで、どのようにゴルフとの関わりを持ったのか」を理解することが重要であるとして、幾つか調査が行われています。10年程前の調査になりますが、ラウンド経験者にゴルフを始めたきっかけを尋ねたリクルートリサーチセンターの調査では、年齢が高いほど、仕事関係者(上司・同僚・取引先等)が多く、年齢が低いほど家族や友人が多くなるとの結果が出ています。「家族・友人」が60代では38.3%であるのに対し、20代では60.7%。特に20-24歳では「家族・友人」が74.6%を占めています。(リクルートリサーチセンター 2014年2月「ゴルフ市場に関する実態調査」) 当然、20代前半でゴルフを始めている人は、大学、大学院などの学生である場合が考えられますのでそのような結果となりますが、60代の割合を見て推測すると、定年後に始めた方は、友人の可能性が高く、仕事関係者と答えた方の多くは20代、30代で始められたのではないかと考えら

れます。ゴルフ人口が最も多かった時代、1990年前後は、就職した会社で上司または同僚に誘われ始めるパターンが大半でありました。(月刊ゴルフマネジメント 2024年10月号) 推測の域を出ませんが、20代、30代の減少は、会社内の人間関係の変化、仕事量の増加などにより、強制を含め、以前提供を受けた「きっかけ」が減少してしまったのではないかと考えられます。居住地域での人間関係は会社内以上に薄くなっていますので、「きっかけ」は減少していきだけで、20代、30代の若者はゴルフにコミットするチャンスを失っているのです。社内のコミュニケーションを円滑にし、多くのアイデアを生み出してもらうことも兼ねてAI企業でゴルフ部を創部したなどの話題(月刊ゴルフマネジメント 2024年10月号)は流れていますが、稀な例です。

ただし、この調査ではゴルフのイメージ調査や今後の実施意向(トライアル意向)と誘われたい相手調査という面白い質問項目も実施しており、結果からするとゴルフ未経験者における今後の意向比率が最も高い世代は20代で44.7%、特に学生に関心が高いことがわかっています。そうなんです、10年前の調査資料なのですが、ゴルフしてみたいと回答している学生が非常に多いのです。

加えて、小林・北氏の調査論文によると、大学在学中の「ゴルフの履修の有無が、在学時および卒業後のゴルフ実施に影響していることが推察された」と記されているのです。(「学生時代及び卒業後のゴルフ経験とゴルフへの意識に関する研究—1970～2014年に国内の大学を卒業した1,800人に対する全国調査より—」ゴルフ教育研究 第6巻第2号 2021年) 質問項目の問題やコーホート分析をしているわけではないので、履修とゴルフ実施の因果関係が明確でないとも言えますが、数値からしても強く影響していると言えるのではないのでしょうか。

4. ゴルフ授業(実習を含む、以下略す。)がゴルフ人口を増やす可能性

少ない調査データからですが、大学でのゴルフ授業がゴルフ人口を増やすことに貢献できる可能性が大きいのです。ただ、本研究会でも扱った事項でもありますが、どれだけの大学でゴルフ授業を開講しているのでしょうか?決して多くはないのです。義務教育ましてや高等学校でゴルフ授業が行われる可能性が極めて低いので、大学でゴルフ授業を開講することが、ゴルフへの「きっかけ」を一番エコノミーに提供できると言えるのではないのでしょうか。

そこで私の提案となりますが、その前に、大学でのゴルフ授業についてです。大学で実施される講義・実習・研究は、教育基本法からすれば、「高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」ために行われるとなるわけですが、これに沿って（一般教養にあたる）ゴルフ授業を考えると、「ゴルフ文化の知識・技術を身に付け、それを活用し、社会の発展に寄与することを目的に実施される」と言えます。より具体的に解釈すれば、ゴルフ文化は、ゴルフ活動に関わる行動・行為、物理的用具・場所、活動の中で人々が作り上げる空間・雰囲気の正統的なパターンを言うでしょうし、活用は、個々人や関わる集団の生活や人生を充実させることであり、社会においてゴルフ文化の有する行動パターンを利用し、人間関係を円滑にすることでもあるでしょう。そして社会の発展に寄与とは、ゴルフというスポーツ文化の正当な継承者・消費者・生産者を形成することであり、それが文化、経済、政治などの良好な成長に貢献すると考えます。

教育は、ある面で国の経済発展に貢献する消費者を育成する役割を有しています。特に、日本のGDPは個人消費の割合が高いことが特徴ですから。文学講義は本や雑誌の消費者を増やしますし、同様に、スポーツの授業はスポーツ用品・用具や施設の消費者を育成しますし、テレビやネット、様々なメディアの消費者を作り出します。それ故、授業・実習は正当な文化の消費者を継続的に育成、再生産しているのであり、ゴルフ授業はゴルフ文化や社会の発展に寄与しているのです。確認が長くなりすぎましたが、ゴルフ人口の減少を抑制し、ゴルフ文化の担い手、消費者を育成、再生産するには、大学でゴルフ授業を開講することが、より有効・重要ではないかと考えるのです。

「何を言っているのですか、そんなことわかっていますよ」と言われそうですが、当然、本研究会の取り組み、大学ゴルフ授業研究会やゴルフ関連団体、地域行政の協力などによって、大学のゴルフ授業の研修、研究やGちゃれ、ゴルマジ等などが実践され、実際にゴルフ授業が、日本の793大学の内、530大学で開講されていることも（大学ゴルフ授業研究会調べ 2013年）認識しております。ただ私自身が、大学でゴルフ授業を開講すると言う時、ゴルフ場（ショートコースを含む）での実習を少しでも含むことを念頭においています。また、大学体育

館や運動場、ゴルフ練習場で実施することを否定するわけではありません。ただ、私自身の経験として、練習場とゴルフ場の間にはかなり厚い壁がありまして、コースの経験がラウンド中でのスポーツマンシップや配慮を土台としたパーティー内のプレイヤーの関係性、スポーツとしてのゲーム性など、重厚なゴルフ文化に触れる機会であり、それらがゴルフへの強い興味と関心を醸成させ、結果的に壁を取り払い、その後のゴルフの継続意欲に大きな影響をもたらすと感じているからなのです。元レッスンプロの濱部は複数大学において行った様々な授業環境の中でのゴルフ授業を振り返って、予算の問題、指導の問題、ゴルフ場の問題等、多くの課題を提示していますが、これらは全て、コースラウンドに向けての課題として捉えることができます。(ゴルフ教育研究 第4巻第1号 2018年)

しかし、530大学が授業を開講しているとはいえ、現実には濱部が課題と共に指摘したように、ゴルフ場での実習は非常に少ないのが現状なのではないでしょうか。実習予算費、ゴルフ場の協力等、様々な課題はあります。私の推測ではありますが、主催する大学体育教員側の問題として、ゴルフ経験のない又は少ない教員が多いことも、実習開催の課題の一つではないかと思えるのです。コースの実習ではサポートする教員が少なからず必要です。コースでの経験がなければ、ラウンド時の様々な事故防止やスムーズな進行をサポートすることもできません。と考える時、ゴルフ人口の問題と同様、20代、30代の教員にゴルフ経験を有している方は少ないと推測してしまうのです。大学院に行き、研究に多くの時間を使わなければならない人が、時間も金銭もかかるゴルフを行うことは非常に困難です。大学に運良く就職できたとしても、会議や授業、そして研究業績を積み重ねるためにどれほどの時間が必要か、誰もが理解するところです。そのような中、プライベートの時間を未経験スポーツ種目習得に当てることは極めて厳しいのが現実ではないでしょうか。

5. 提案—本研究会で未経験者・初心者のための研修会を開講—

このように推論をめぐらせるとき、大学教員で未経験者や初心者の方々が出張扱いで、ゴルフ文化を経験し上達してもらう研修会の開講は非常に重要で、それを提供することが、本研究会の大きな役割の一つなのではないでしょうか。具体的には、2泊3日、はじめの1.5日間を練習場でのショット、アプローチ、パ

ター練習を、最終日にはハーフラウンドをプレイし、何回かの参加の中で、指導者検定を受験するというプログラムではどうでしょうか。指導は参加される先生方やレッスンプロで入れ変わりながら対応できるのではないのでしょうか。最終日のハーフラウンドは、連日のラウンドが厳しい私のような高齢の定年退職者もいますので、対応は可能かと思えます。十分とは言えないでしょうし、実際に行うとなると考えなければならない様々な問題点が生じるでしょうが、これまでと同様の体制でも可能だと考えています。参加いただければ、より多くのネットワークも生まれ、大学でのゴルフ授業・実習の開講に向けた情報交換も気軽にできると思えます。

最後になりましたが、風が吹けば桶屋が儲かる式の論理に近い推論ではありますが、将来のゴルフ人口の激減が心配され、20代のゴルフ人口を増やす方策が求められている時期に、大学でのゴルフ授業・実習が極めて重要な方策の一つとなることを見てきました。その延長線上で、本研究会がゴルフ未経験者、初心者である大学体育教員対象の研修会を開催し、大学ゴルフ授業・実習の開講を広めていくための重要な役割を果たすことができるのではないかと提案した次第です。勝手な提案ではありますが、皆様のコミュニケーションの題材となれば幸いです。

*本章企画について

全国大学ゴルフ指導者研究 編集委員会

全国大学ゴルフ指導者研究会第 13 号編集委員会にて、「ゴルフ授業、ゴルフ指導について研究会会員の考えをぶつけ合う場が不足しており、本誌をその場にしては」との意見が賛同され、本研究会のあり方を加えて、募集することになりました。今回は、初回ということもあり、研究会全会員ではなく、数名の先生に下記提案を行い、執筆いただきました。編集委員会は、今後も本企画を継続していきたいと考えております。研究会会員の皆様には、批評、批判、賛同等の意見や新たな視点の提示を含め、是非、自らの見解を本誌にぶつけていただきたいと思います。また、本章名を「ゴルフ指導者研究雑考」といたしましたが、より良い名称の提案もお願いいたします。編集委員会から個人にお願いすることもあるかもしれませんが、何卒よろしくお願いいたします。

下記に関する論文、報告、紀行文、書評等を募集いたします。

1. ゴルフ指導を考える

a. 体験

大学授業、個人的なコミュニティでの指導、スクールなどで受講した指導等の経験からゴルフ指導について個人的に思うこと。

b. 理論

ゴルフ技術論を含むゴルフ指導の著書、雑誌、youtube, web 等について個人的に思うこと。

2. ゴルフ授業の意義

教材としてゴルフを実践する意義について、個人的に思うこと。

3. ゴルフ研究会について思うこと（改革案、進むべき道等）

個人的な思いでかまいませんので、どしどし応募ください。よろしくお願いいたします。

Ⅲ. 令和5年度全国大学ゴルフ指導者研究会 第28回指導者研修会報告

1. 開催要項、日課・日程、参加費用、公認指導者認定実施要項

1. 目的：大学におけるゴルフ教育の充実と発展に寄与するため、研修会を開催しゴルフ技術、理論、指導法について研究討議を行い、技術力と指導力の向上を図る。

2. 主催、後援：全国大学ゴルフ指導者研究会主催、全国大学体育連合後援

3. 期間、会場、参加人数：

期間：2024年3月19日（火）～3月21日（木）（2泊3日間）

受付：13時00分～13時30分

会場：那須小川ゴルフクラブ <https://www.nasuogawagc.co.jp/>

〒324-0502 栃木県那須郡那珂川町三輪 1283 TEL: 0287-96-2121

宿舎：那須小川ゴルフクラブ宿舎宿泊

参加人数：15名（会員12名、非会員3名）

4. 研修会費用：参加費：会員 5,000円、非会員 7,000円、ゴルフ場使用料：34,740円

全国大学ゴルフ指導者研究会 第28回指導者研修会 日程

5. 研修会概要：

1日目：

午後：打撃練習場における練習、練習コースにおいて様々なライからのショット、レベルアップ練習とショート・ゲーム技術研修

夜：講義研修「ゴルフスイング理論とゴルフスイングの重心位置のトレーニング」

2日目：

午前・午後：プロによるオンコースレッスン、コースでの実戦研修による総合技術の向上とコース・マネジメント

夜：2023年度全国大学ゴルフ指導者研究会総会個別のスイングチェック

3日目：総合練習（コンペ形式）

	3月19日 火曜日	3月20日 水曜日	3月21日 金曜日
7:00		個別練習	個別練習
7:30		朝食	朝食
8:00		ラウンド レッスン (18H)	総合練習 コンペ形式
12:00			
12:30	受付		
13:00	打撃練習		
14:00		個別練習	閉校式
14:30	プラス3コース 様々なライからの 打ち方講習	グリーン周り指導 法	解散
17:00	開講式	個別練習	
18:00	夕食	夕食	
19:00	理論講義 スイング理論道具 について	研究会総会 個別スイングチェッ ク	
21:00	終了	終了	
22:00	就寝	就寝	

6. 総括： 天気に恵まれ、朝6時からの練習が可能であり、レベルアップ研修としては十分な時間と環境が確保できた。指導法としては、とてもシンプルで学生に混乱させない方法を指導頂いた。

今年は初めての試みとして、2日目のオンコースレッスン時には、何らかの相乗効果を期待してゴルフ部学生を含むパーティーで実施したが、特に効果のある試みとはならなかった。

2日目の夜は個別のスイングチェックを総会後に実施し、前田プロから解説頂き、各指導者自分のスイングの特性を確認することができて、とても貴重な機会となり得るものが多かった。

2. 実技研修会 前田総太郎プロによるレッスン

・左足上がり、右足上がり

Fig.1 の場合は、傾斜に関わらず重力に対して垂直にアドレスした場合である。ボールは低い方に位置し、ハンドファーストとなることから、フォロースルーは傾斜が邪魔になる。よって、ヘッドは地面に打ち込むパンチショットのイメージとなり、距離はあまりでない。距離が短く方向性重視の場合に有効な打ち方となる。この場合、クラブのロフトは通常通りとなることから、通常の番手で飛距離が計算出来る。



Fig. 1 重力に垂直に立つ Fig. 2 傾斜に平行に立つ

Fig.2 の場合は、傾斜の低い方に体重をかけたまま、肩のラインが傾斜と並行になる様に体幹を傾けてアドレスする。ボールの位置は、クラブが振り抜けるように体の中心、もしくは傾斜の高い方へ位置する。この場合、クラブのロフトは開くことになるためボールは上方に飛ぶことから、通常の番手よりロフトが立っているものにしなければ飛距離は短めになってしまう。

・極端なつま先下がり

アドレスは、最大に近いほどワイドスタンスにして腰を出来るだけ落として低い姿勢取る (Fig.3)。クラブが確実にボールに届くように少々長めに持つ。傾斜の稜線に沿ってク

ラブヘッドを走らせるイメージでスイングする。その際、ハンドファーストにならないように注意する（スライスもしくはシャンクになる可能性がある）。上から打ち込むイメージが強くなるようにスイングする（引っかかる可能性がある）。

・アプローチ

30yd 以内はパターと同様にカップを狙っていく。一つの方法として、パターと同じ感覚で打つ。その際、パターと同様にコックを作らないように右腕尺骨とシャフトの角度は一直線になるように構え、アドレスもパターと同じ姿勢にする。そうするとクラブヘッドのヒールが若干浮く形になる。

これによって少々ラフがあってもクラブの振り抜けは良くなり、芝に食わ

れにくく力感が確実にクラブに伝わりやすくなる。ボールは芯で打つのではなく、トゥ側で打つため意図的に芯を外すことで飛びすぎるリスクが下がり、緩まずしっかり振る事が出来る。アプローチのミスはダウンスイングの緩みから発生するため、しっかり振る事が重要。芯を外すことでボール初速は下がり、下りのアプローチでもボールの転がりを抑える事が可能となる。

・アプローチとパターの距離感

下手投げの研究では、引く時の手の速度の 2.1 倍の速度で投げる場合が一番距離感を調節しやすい。グリーン上、グリーン周りでのターゲットへの力加減は、テイクバックの速度の 2.1 倍の速度で打つことがポイント。つまり、アドレスからテイクバックまで 1 で引いたら、ダウンスイングからインパクト、フォロースルーまでを 1 で振ると、結果約 2 倍の速度でボールにヘッドが当たることになる。距離感を出すためには加速させることが重要で、減速させて距離感を合わせることはできない。



Fig. 3 ワイドスタンスで膝を曲げて腰を落としたアドレス

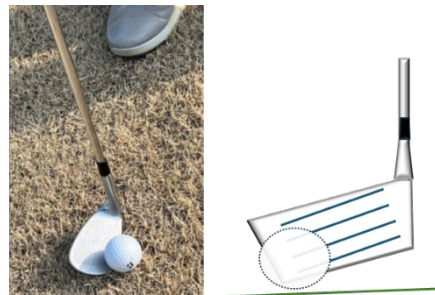


Fig. 4 ヒールを浮かせてトゥでボールをはじく

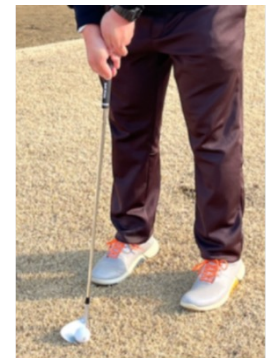


Fig. 5 グリップはコックを作らずパターと同じ

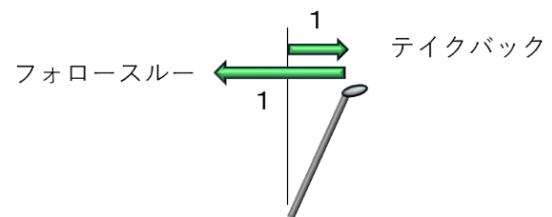


Fig.6 テイクバックとダウンスイング+ミート+フォロースルーは 1:1 の関係

アプローチとパターで一番注意すべきことは、緩むことである。緩むことでダフリやトップのようなミスが出ることから、ミスの確立を減らすことにつながる。

3. 講義報告 前田総太郎プロ

3月19日 19時-20時、夜の講義 前田 総太郎プロ

【略歴】経歴：私立鎌倉学園高等学校卒業，サンディエゴゴルフアカデミー卒業，日本ウエルネススポーツ専門学校 AT 科卒業，東北福祉大学女子ソフトボール部トレーナー，キャロウェイゴルフ株式会社マーケティング部

現在：芝浦工業大学非常勤講師，日本プロゴルフ協会ティーチングプロ B 級，スポーツコンサルティング団体代表，鎌倉プリンスホテル七里ガ浜ゴルフ場専属プロ

身体バランスの強化

ゴルフスイングの軸は脊柱であり、脊柱の前方に位置する胸郭や顔などは、若干円運動を行うのは当たり前である。体重は右足側と左足側に移動するが、回転軸である脊柱は移動しない。そのためには、足の裏が地面にたいして安定している必要がある。

足首回りの小さなスタビライザーマッスルの反応を早くすることで重心のブレは少なくなり、ダフリやトップのミスショットの軽減に繋がる。その補強に有効なのがバランスディスクの利用である。

3分程度の補強でも、地面に根が生えたような感覚を覚え、安定感を増すことを確認することができた。

20日 20-21時 総会後の各参加者へのスイングチェック 講師：前田 総太郎プロ

参加者各個人のドライバーショットの動画を投



Fig.7 バランスディスクを利用した補強

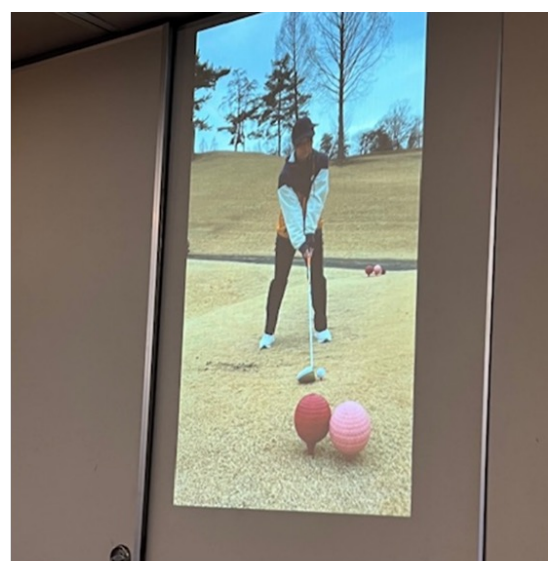


Fig.8 参加者全員の各個人スイングからワンポイント

影し、全員でスイングチェックを実施し、前田プロに現状の特徴を開説いただき、改善点のヒントを頂いた。

主なチェック内容は、

- ・アドレス時のイメージは、三脚の脚の様に台形となり、左右に壁を作りやすいポジションを取り左右へのブレを確実になくすこと。体重は母指球と土踏まずあたり（前側内側）とかかとの内側（後ろ側内側）で7：3～8：2になるように構えて、スイング中に前後の体重配分が変わらないようにする。
- ・重心の考え方は、前方に飛ばすことを意識しすぎると右足加重から左足加重する際に、後ろから前、右から左への重心移動が起りやすくなることで、結果的にスウェーや前後のブレが起こる。常に脊柱が動くことがないように上体は捻転し、腕を極力横方向へ使わずに上体の回転運動によってテイクバックし、回転運動で遠心力と腕の上下運動を利用してヘッドスピードを上げることから、大きな遠心力に負けないように、常に脊柱が軸になる意識があることが好ましい。
- ・ダウンスイングからインパクトにかけて、骨盤の前傾がほどけて右腰がボールに近づき、腕の通り道がないことでつまり気味となり、上半身を浮き上がらせてインパクトをすることがある。これでは上体の前傾角の維持ができず、上下方向のブレがでて、ダフリ、トップのミスにつながってしまう。ダウンスイングで両手が下りてくる腰の前のスペースを空けておく（通り道を確保しておく）為に骨盤の前傾を維持することが前傾角度の維持に大きく影響する。前傾角度の維持がなければ、回転運動で上から下へのヘッド軌道を得ることはできない。

Ⅳ. 全国大学ゴルフ指導者研究会総会資料

全国大学ゴルフ指導者研究会 2023年度決算書

収入の部

(円)

項目	2022年度決算額	2023年度予算額	2023年度決算額	備考
年会費	39,000	70,000	33,000	11名
助成金・寄付金	30,000	30,000	-	
利子	-	0	-	
研修会残金	-	0	6,310	
当期収入合計	69,000	100,000	39,310	
前年度繰越金	54,833	54,989	54,989	
収入合計	123,833	154,989	94,299	

支出の部

(円)

項目	2022年度決算	2023年度予算額	2023年度決算	備考
研究会誌作成費	26,777	25,000	-	
通信費	13,114	12,000	-	
研修会開催費	22,920	60,000	-	
交通費	-	0	-	
会議費	-	0	-	
広報費	3,457	3,500	4,064	2493 (ドメイン)、1571 (サーバー)
借入金返済	-	0	-	
雑費	2,576	1,000	550	硬貨引き出し料110.振込440
当期支出合計	68,844	101,500	4,614	
次年度繰越金	54,989	53,489	89,685	
支出合計	123,833	154,989	94,299	

会計帳簿、証拠書類を監査した結果、上記、収支決算書が相違ないことを確認いたしましたので報告致します。

2024年 4月 1日

監事

金田 晃一

仲 立貴



2023年度全国大学ゴルフ指導者研究会第28回研修会収支報告

事務局作成 2024年3月24日

収入 (円)

大項目	中項目	金額	備考
研修会参加費		55,000	5000*11
研修会参加費(非会員)		21,000	7000 * 3
合計		76,000	

支出 (円)

大項目	中項目	金額	備考
講師謝礼	講師：前田プロ	50,000	2日間（原稿料を含む）交通費含む
	小計	50,000	
運営諸経費	講師宿泊ラウンド	19,690	前田プロ：宿泊・ラウンド
	小計	19,690	
その他(雑費等)			
	小計	0	
研究会費へ		6,310	
	合計	76,000	

会計帳簿、証拠書類を監査した結果、上記、収支決算書が相違ないことを確認いたしましたので報告致します。

2024年 3月 27日

監事

金田 晃一



仲 立貴



全国大学ゴルフ指導者研究会 2024年度（令和6年度）予算

収入の部 (円)				
項目	2023年度 予算額	2023年度 収入	2024年度 予算額	備考
年会費	60,000	6,000	45,000	
助成金・寄付金	30,000	0	0	広告料等
利子	0	0	0	
研修会残金	0	0	0	
繰越	11,500	11,500	0	
合計	101,500	17,500	45,000	
支出の部 (円)				
項目	2023年度 支出予算	2023年度 支出	2024年度 支出予算	備考
研究会誌作成費	25,000	0	0	
通信費	12,000	0	0	
研修会開催費	60,000	0	0	
交通費	0	0	0	
会議費	0	0	0	
広報費	3,500	3,457	3,500	ホームページ関連費用
借入金返済	0	0	0	
雑費	1,000	0	0	
繰越金	0	14,043	41,500	
合計	101,500	17,500	45,000	

V. 会則・会員名簿

全国大学ゴルフ指導者研究会会則

[総則]

第1条 本会を全国大学ゴルフ指導者研究会と称する。

第2条 本会は、大学ゴルフ指導者の養成、並びに研究と研鑽を支援し、ゴルフを通して、学生のよりよき発達に寄与する事を目的とする。

第3条 本会の本部は、原則として事務局長（常務理事）の所属機関に置く。[事業]

第4条 本会の目的を達成するため、次の事業を行う。

2 研究、および研修会の開催。

3 機関誌の刊行。

4 公認指導者の認定

5 会員の研究に資する情報の収集と紹介。

6 支部、および研究グループの育成。

7 その他本会の目的を達成するために必要な事業。

[会員]

第5条 会員の種類を正会員と賛助会員の2種類とする。

2 正会員は、大学ゴルフ指導者、または本会の趣旨に賛同し共に活動しようとする者で、会費を納入した者。

3 賛助会員は、本会の趣旨に賛同し、その育成後援に協力する者で、年会費を納入した者。第6条 入会・退会は、次のように規定する。

2 本会の趣旨に賛同し入会を希望する者は、正会員1名の推薦を受けて所定用紙により、事務局もしくは役員に申込みを行うとともに、会費を納入する。

3 退会を希望する者は、事務局もしくは役員に退会の申し出をする。また、会費を2年間納入しない者は退会したものとする。

[役員]

第7条 本会の事業を運営するために、会員の中から、会長（1名）、副会長（若干名）、理事長（1名）、副理事長（1名）、常務理事（若干名）、理事（若干名）、監事（若干名）を総会において選出する。

第8条 会長は、本会を代表し会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、これを代行する。理事長は、理事会会務を総括する。

副理事長は、理事長を補佐し、理事長に事故あるときは、これを代行する。常務理事は、運営、その他の日常の会務を執行する。

理事は、会務を執行する。監事は、会計を監査する。

第9条 役員任期は3年とし、再任を妨げない。

第10条 本会に名誉顧問・名誉会員を置くことができる。

2 名誉顧問・名誉会員は役員会で推薦し、総会において承認する。

[総会、役員会及び理事会]

第 11 条 本会に総会を置く。2 総会は、本会の最高決議機関であり、会長が招集し、出席会員をもって構成する。

3 総会は毎年 1 回開催し、役員を選出及び本会の運営に関する重要事項を審議する。

4 総会での審議事項は、出席会員の 3 分の 2 以上の賛成により決議する。第 12 条 本会に役員会を置く。

2 役員会は会長が招集し、会長、副会長、理事長、副理事長、常務理事（事務局長、副事務局長）、理事、監事をもって構成する。

3 前項の規程にかかわらず、会長が必要と認めたときは、役員会にその他の会員を加えることができる。

4 本会の事業・運営に関する重要事項を審議する。

第 13 条 本会に理事会を置く。

2 理事会は理事長が招集し、理事長、副理事長、常務理事、及び理事長が必要と認めた理事、監事、正会員で構成する。

3 役員会の方針に基づき日常の会務を執行する。

[事務局]

第 14 条 本会に事務局を置き、常務理事である事務局長、副事務局長を中心に日常業務を執行する。

2 事務局は事務局長の所属機関に、原則として 3 年間設置する。

3 事務局住所は、埼玉県さいたま市見沼区深作 307 芝浦工業大学気付とする。

[支部・専門委員会]

第 15 条 本会の業務を推進するために、支部・専門委員会を置くことができる。

[会計]

第 16 条 本会の経費は、会費、寄付及びその他の収入をもって支弁する。

2 会員の年会費は 3,000 円とする。

3 賛助会員の年会費は、1 口 1 万円とし、2 口以上とする。

第 17 条 本会の会計年度は、毎年 4 月 1 日より翌年 3 月 31 日とし、会費の納入期限は 4 月 1 日から 9 月 30 日迄とする。

[賛助会員に関する細則]

第 18 条 会は、賛助会員に次の特典を与えるものとする。

第 19 条 本会が刊行する機関誌の無償送付と、本会が指定する広告の無償掲載することができる。

2 本会が主催する研修会、主たる会議などにオブザーバーとして参加することができる。

3 会員の関連する学会、研究会、講習会への推薦等の便宜を図ることができる。 [広告掲載規定に関する細則]

第 20 条 広告掲載に関しては、別紙の通り定める。

附 則 1 この会則は、平成 15 年 8 月 17 日より施行する。 2 この会則は、平成 22 年 8 月 25 日より施行する。

3 この会則は、平成 23 年 8 月 21 日より施行する。 4 この会則は、令和 3 年 3 月 15 日より施行する。

会員名簿

2023年3月現在

No.	氏名	所属大学	役職
1	大澤 啓藏	亜細亜大学	名誉顧問
2	辻井 義弘	元・摂南大学	名誉顧問
3	加藤 史夫	元・日本大学	名誉顧問
4	柴田 一男	元・大同大学	名誉顧問
5	竹内 暢子	元・千葉敬愛短期大学	名誉顧問
6	西藤 宏司	元・筑波大学	名誉顧問
7	早田 卓次	日本大学名誉教授	名誉顧問
8	松田 一如	日本歯科大学名誉教授	名誉顧問
9	光永 吉輝	駒澤大学名誉教授	名誉顧問
10	三幣 晴三	駒澤大学名誉教授	名誉顧問
11	積山 敬経	元・大阪工業大学	名誉顧問
12	鈴木 昭彦	高崎商科大学	会長
13	矢崎 弥		副会長
14	中島 弘毅	松本大学	理事長
15	江口 潤	産業能率大学	常任理事（事務局長）
16	佐伯 聡史	富山大学	理事
17	菅生 貴之	大阪体育大学	理事
18	佐古 隆之	日本女子大学	理事
19	山根 真紀	日本福祉大学	理事
20	西村 次郎	岡山理科大学	理事
21	金田 晃一	千葉工科大学	監事
22	仲 立貴	至学館大学	監事
23	浜野 学	芝浦工業大学	
24	藤井 健平	岡山理科大学	
25	下谷内 勝利	駒澤大学	
26	白木 仁	筑波大学	
27	末次 美樹	駒澤大学	
28	市村 史郎	東京理科大	
29	笠井 淳	法政大学	
30	河田 隆	宇都宮短期大学	
31	公文 暉巴	法政大学（兼任）	
32	小島 正行	星城大学	
33	雑賀 亮一	太成学院大学	
34	佐々木 正省		
35	三浦 恵子	梅花女子大学	
36	中山 より	大阪成形造形大学	
37	畑佐 泰子	大阪成蹊大学	
38	深見 和男	日本大学	
39	柳 浩二郎	駒澤大学	
40	柳田 信也	東京理科大学	
41	山中博史	滋賀短期大学	
42	竹田 幸夫	駒澤大学	
43	廣瀬文彦	白鵬大学	
44	河合 史菜	岡山理科大学	
45	沖 和磨	日本大学理工学部	
46	福島 洋樹	富山大学	

編 集 委 員

委員長 鈴木 昭彦

副委員長 矢崎 弥

委 員 金田 晃一

全国大学ゴルフ指導者研究会 第 14 号

発行日 令和 6 年 11 月 1 日

発行者 鈴木 昭彦

発行所 全国大学ゴルフ指導者研究会

〒 259-1197 神奈川県伊勢原市上粕屋 1573 産業能率大学
情報マネジメント学部 江口研究室

全国大学ゴルフ指導者研究会

事務局 〒2591197 神奈川県伊勢原市上粕屋1573
産業能率大学情報マネジメント学部江口研究室 江口潤
E-mail : eguchi@misanno.ac.jp

産業能率大学